

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Y.アヨーシ：偉大な兄をもった平凡な弟

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001401">https://doi.org/10.15021/00001401</a>

## Y.アヨーシ ——偉大な兄をもった平凡な弟

### 解説

- 1 生まれ故郷
- 2 兄との出会い
- 3 ウランバートル生活
- 4 モスクワ留学

- 5 協同組合連盟にて
- 6 貿易の専門家
- 7 貿易省副大臣
- 8 私生活
- 9 兄嫁フィラトワ

### 解説

長期政権を維持していたY. ツェデンバル書記長はモスクワで休養中の1984年、すべての公職から解任され、その後1991年に客死した。その後、フィラトワ夫人は2001年に死亡したので、現在、近親者として残っているのは、モスクワに住む息子のTs.ゾリグ氏と、ウランバートルに住む弟アヨーシらである。息子の著した回想記『最後の7年』における「7年」とは、解任後にモスクワで暮らした年月を指す。この著作者へのインタビューは別途実施することとして、実弟アヨーシとまず会って話を聞いておきたいという願いは偶然の出会いによって叶えられた。

2004年7月、モンゴルから帰る飛行機の中で私は林親之氏と知り合った。林氏は社会主義時代に日本がモンゴルに建設したカシミヤ工場で、技術移転に尽力した専門家である。カシミヤ加工業はモンゴル国において現在も外貨を大いに獲得しうる重要な産業部門であるから、林氏はさしずめモンゴル国にとって産業化の恩人とも言うべき功労者の1人である。社会主義時代に日本の援助によってカシミヤ産業が創出されるさまはSER41号に掲げたP.ダムディン氏の語りに詳しいので参照されたい。ちなみに、P.ダムディン氏の回想に登場する林氏とは別人である。

林親之氏は現在もカシミヤの原毛や製品の輸入にたずさわり、しばしばモンゴル国に出張しておられるが、そのビジネスパートナーの1人がアヨーシの娘であった。林氏からもう1人の娘であるボヤントウグスさんを紹介していただき、ボヤントウグスさんから父アヨーシ氏へのインタビューをお願いした。インタビューは2005年6月9日、ボヤントウグスさんの職場であるモンゴル科学アカデミー国際関係研究所で実施し、彼女の同僚で来日経験のあるセルジャブさんも同席した。

インタビュー全体を通じて、自分自身の人生さえも傍観してきたような口ぶりである点が印象的であった。政治からは遠いところを実は歩いてきた人なのだと知れた。こちらが促してもなお決して兄を守ろうと主張するわけでもなく、もちろん非難するわけで

もない。それほど穏やかでごく普通の人であるという人となり自体が、社会主義時代の政治環境に関する貴重な参考になっているように思われる。

## 文 献

小長谷有紀編著

2003 『モンゴル国における20世紀—社会主義を生きた人びとの証言』（国立民族学博物館調査報告SER41号）国立民族学博物館。

YA：ユムジャーギーン・アヨーシ

IL：イチンホルローギーン・ルハグワスレン

KY：小長谷有紀

## 1 生まれ故郷

KY：あなたとお会いできてとてもうれしく思います。今日のインタビューを、あなたの幼少時のことから始めてはどうでしょうか？いつ、どこでお生まれになったか、ご両親やごきょうだいについてお話しいただけますか？

YA：では、そうしましょう。私は、1926年、現在のオブス県ダウスト郡に生まれた人間です。わが家が冬営地にいる時に生まれたそうです。私は双子だったそうです。双子の一方は生後1日で亡くなったそうです。私の母は12回子どもを産みました。私は11人目の子です。

わが家は春には少し山を登ったところの春営地に宿営し、穀物を植え、そして夏営地に移動しました。時にはオブス湖畔に春営することもありました。わが家の夏営地は山の上のほうにありましたよ。夏場は低地ではハエが多くて暑いので、わが家はいつも山の上のほうに登って夏営していました。夏営地に行くには、ハンドガイト川に沿って上流に登って行きます。わが家の夏営地は、夏はたいへん涼しく、草もよく生える土地でした。

イフタンス（大唐奴）山からは多くの川が流れ出しています。そのうちの2つの美しい川がわが郡を流れています。1つはハンドガイト川、もう1つはタルハナ川です。

わが故郷の山々には塩が豊富です。ジャムツ・ダウスという岩塩です。とくに塩の多い「ダウスト・オール（塩の山）」という美しい山があります。1966年にモンゴルとソビエトの政府が国境についての条約を結びました。この条約によって、その山の一部がソ連領になってしまったのです。山のこちら側がモンゴル領として残りました。ロシア

人は自国領土となった部分から塩を採るようになりました。わが国でも、以前と同様に自国領土の部分から塩を採っています。そこでは、少し地面を掘って斧でたたくと大きな四角形の塩が採れるのです。わが家では、こうして採った塩を1年まるまる使っていたのですよ。とても良質な塩でした。

**KY:** 穀物は何を植えていたのですか？

**YA:** ロシア語で「ヤチメニ」という穀物でした。これは赤大麦です。家庭によって畑の広さはいろいろでした。1ヶ所に多くの家族の畑が集まっていたのです。春に穀物を植え、夏営地に移動したのち、20日ごとに代わる代わる畑に来て灌水していました。畑地には灌水溝を引いていたのです。その溝は「アリグ」と呼ばれていました。

当時は各家庭に石臼がありました。まるい形の2つの石です。それらを重ねて置いて、上側の石を回すのです。2つの石のあいだに穀物を入れるのですよ。こうして麦粉を作っていました。良い麦粉ができるのですよ。わが家は主に穀物を植えることで生活していました。家畜もいましたが、わが家だけでなく、わが故郷の人びとは主穀物を植えて畑で生活していました。隣のサギル郡の人びとも穀物を植えることで生活していました。

**KY:** おたくの家畜はたくさんでしたか？

**YA:** わが家には羊と山羊約150頭、乳牛4～5頭、去勢雄牛3～4頭がいました。わが故郷では、家財道具を去勢雄牛に積んで、それを放して追って移動するのです。この方法は「ソル・アチホ（開放型運搬）」と言います。去勢雄牛が少ない家庭では、ほかの家から1～2頭の去勢雄牛を借りるのでした。子だくさんな家庭の生活はやや貧しかったですからね。そういう家ではほかの家からしばしば去勢雄牛を借りていました。家畜の多い裕福な家庭も、わが故郷にはずいぶんありました。

穀物は、裕福な家庭でも貧しい家庭でも植えていました。みなが畑作をしていたということです。春に植える時と秋に収穫する時には仕事が忙しくなります。そういう時には互いに助け合うのです。そうして助けてもらう時には必ず、助けてもらった家は山羊または羊を解体し、おいしい料理を作り、彼らをもてなす習慣がありました。

わが故郷では植えた穀物を手で刈り取ります。そしてそれをいくつかに分けて束にして乾燥させます。穀物が乾燥すれば、脱穀作業が始まります。脱穀場という特別な場所があるのです。脱穀した穀物をまたいくつかに分けて積み上げるのです。それからそれを風の強い時にシャベルで少しずつ掻き揚げてまた積み上げます。そうやって乾燥した草とごみを取り除くのです。

わが故郷の西部に住むオリヤンハイ族はドゥルベド語がたいへん上手です。彼らも穀物を栽培していました。オリヤンハイ族はわが故郷に来ては家々をまわり、シミーン・アルヒという酒を飲んで帰って行きました。彼らの生活様式は私たちの生活ととくに変わりません。ほとんど同じですよ。彼らもまた鍋で蒸留するシミーン・アルヒを作りま

す。アーロールも作ります。けれども、オリヤンハイ族の所有する家畜頭数は私たちに比べれば少ないものでした。

わが郡は、昔の行政区分で言えば、ドゥルベド・ダライ・ハーン・アイマグのゾリグト・ハーン旗です。私の父はそう呼んでいました。もともとドゥルベドの人びとは現在のセレンゲ県のキャフタ周辺に居住していたようです。よくは分かりませんが。その後、ドゥルベド・ダライ・ハーンが彼らをオプス湖の北に移住させたそうです。穀物の栽培に適した土地だったのでドゥルベドの人びとを移住させたようです。ドゥルベドの人びとは移住前にも穀物や野菜を栽培していたかもしれません。ドゥルベド族がいつ移住して来たかについてはわかりません。およそ100年以上前に移動して来たかと思われます。

私の母は3人きょうだいでした。母は一番上の娘でした。母の下にはチメドツェレン、そして末娘のデウエーがいました。母の弟妹は私たちが住んでいた場所の近くに住んでいました。母の弟はチメドツェレンという名前でした。チメドツェレン家には子どもが1人しかいませんでした。それで、チメドツェレン家は私の上の兄を養子にしたのです。

1920年代末に裕福な人たちの財産を没収しましたよね。その時、私の母の弟のチメドツェレンも逮捕されました。家畜が多く、裕福な家庭だったから逮捕されたと言われています。オラーンゴム刑務所に投獄されたそうです。そして、オラーンゴムの近くで射殺されました。チメドツェレン家の家畜はすべて没収されました。その後、チメドツェレン叔父さんが最後に娶った奥さんが亡くなりました。それでわが家から養子に出された兄は帰って来たのです。その後、その兄は何年かして徴兵されました。除隊後はウランバートルで生活し、最近亡くなりました。

私の父も3人きょうだいでした。姉が1人、そして下にもう1人いました。3人とも生まれ故郷で家畜を追って生活していました。わが故郷では子たくさんな家庭はしばしば子どもをほかの家に養子に出すものでした。だいたい自分のきょうだいや親戚に養子に出すことが多かったです。子どもの少ない家庭だけが他家から養子をもらい受けていました。きょうだい、親戚の間柄でなくても子どもが欲しい家庭には養子に出していました。

私は自分の兄であるツェデンバルの顔をまったく知らなかったのですよ。彼は私が生まれた時はオラーンゴムの小学校で2年生を終え、ホブドの方に行っていました。そこで小学校の4年生を終え、ウランバートルの学校に行きました。兄はウランバートルに移るとすぐに他県から来た大勢の子どもたちと一緒にロシアの学校に送られたそうです。最初はウランウデで学んでいたようです。それからイルクーツクに行ったようです。

イルクーツクではいろいろな学校で学んでいたようです。医療専門学校に留学してい

たという話もあります。その後、イルクーツクの財務学院に入学したようです。そんなわけで、およそ10年間消息不明だったわけです。便りも無ければ、何の音沙汰も無かったのですよ。兄のことについて話すのは母だけでした。

父は1930年代末に亡くなりました。父はわが郡に隣接するサンギル郡に行き、ある人から昔の借金の返済を要求したようです。そこから帰って来たあとに身体が悪くなりました。それから2日後に亡くなりました。今思えば、盲腸にかかったのではないかと思います。

## 2 兄との出会い

KY：あなたご自身はいつ学校に入学されたのですか？

YA：12～13歳の時に、郡の中心地に「臨時学校」が開催されたのです。その学校では子たくさんな家庭の子どもが勉強していました。私はふた夏、その学校で勉強したように記憶しています。そうしてモンゴル文字が書けるようになり、また四則計算ができるようになったのです。当時、文字が書け、四則計算のできる人は家畜頭数調べに駆り出されていました。私も家畜頭数調べに駆り出されるようになりました。

そのころ初めて兄ツェデンバルの消息を聞いたのです。それ以前、私たちは兄のことについてまったく知りませんでした。私たちは「うちの兄さんはいつ家に帰って来るのかなあ？」とばかり話していました。兄はイルクーツクの大学を卒業し、ウランバートル市にある財政専門学校の教務主任に任命されました。兄はその学校に半年ほど勤務したようです。1939年だったでしょうか、よく覚えていませんが、兄はわが家に人づてにお金を送ってくれました。そして、「もうすぐ家に帰る」と人づてに伝えて来たのです。

当時、父は亡くなっていました。帰るとは言ったものの、兄は帰って来ませんでした。戦争が始まって帰って来ることができなかったのでしょうか。1939年、モンゴルと日本のあいだで戦争が始まる直前に、兄は突然、モンゴル銀行の総裁に任命されました。開戦と同時にモンゴル政府は「戦争後方支援」を兄に任せました。戦争で闘っている兵士たちに食糧や衣類を供給する後方支援のすべてを任せました。

当時、駐モンゴルソ連大使はV.イワノフという人でした。兄は彼と一緒に「戦争後方支援」でスフバートル県やヘンティー県、そしてドルノド県などをまわりました。兄はこうした県から兵士用の食糧を調達していたようです。武器や兵器はソ連から提供されていたと思います。ソ連から兵士も来ていたようです。兄は1年ほどそうして働いていたと思います。そんなに長くはなかったようです。

そして戦争が終わりました。もっとも私はあとになってこの話を知ったのですが。そうこうしているうちにモンゴル人民革命党の第10回党大会が開催されました。この会議で兄はモンゴル人民革命党中央委員会の書記長に選出されたのです。

KY：それは何年のことですか？

YA：1940年のことです。兄はモンゴル銀行の総裁に任命され、その後、財務省副大臣に任命されたのです。その後、「ある時、仕事で地方に行って帰って来たら、本物の財務大臣に任命されていた！」と兄は言うのでした。

1940年にモンゴル人民革命党中央委員会の書記長に任命されたのち、兄は家に帰って来ました。兄が家に帰って来たその日、私は羊を放牧していました。夕刻、羊を家の近くまで連れ戻して来ると、家の外に格好いい黒い車に乗った人たちが来ていたのです。私は誰が訪れて来たのか分からなかったので家に駆けるようにして帰りました。ところが、それは兄だったのです。その日は羊を遠くまで放牧していたのでかなり疲れて帰って来たのでしょうか、私はすぐに寝てしまいました。こうして私は兄と初めて対面したのです。私はその時14歳でした。もし、当時私がウランバートルに行っていたのなら兄と会っていたことでしょうか。兄は10年間まったく音信不通の末に家に帰って来たのですよ。母は「兄さんはソ連の学校に留学したのよ！」とよく言っていました。でも、私たちには手紙も来なければ、何の音沙汰もありませんでした。たいへんな時期だったわけですよ。当時は郵便制度なんてないでしょ。馬による駅伝制があるだけです。馬による駅伝制はウランバートルまでは機能していたのでしょうか、それともそうではなかったのかまったく分かりませんが、当時、そんな知識はまったくありませんでしたから。

初めて見た兄はスーツを着ていました。そのころ、スーツを「ロシア服」と呼んでいました。兄が家に帰って来た時、Kh.チョイバルサン元帥も公務で西部各県を訪れることになったようです。兄が帰郷して2～3日経ったころ、Kh.チョイバルサンが家にやって来ました。Kh.チョイバルサンにはたくさんの人が同行していました。わが家の外には10台ぐらいの車が停まったと思います。私が羊を放牧して、夕方戻って来ると家の外には色とりどりのテントが張られていました。そして、たくさんの車が停まっていました。「Kh.チョイバルサン元帥とソ連大使がやって来た！」と人びとは口々に話していました。彼らは私が羊を放牧しに出かけた直後、朝かなり早いうちにわが家にやって来たようでした。それでわが村の住民を集めて人民革命党第10回党大会の決定についての話をしたのでした。

彼らは母に、写真立てに入った格好よく撮れた兄の写真をプレゼントしてくれました。Kh.チョイバルサン元帥はその写真を母に手渡す際に、「あなたはモンゴル人民革命党の書記長を産んだとても功績のある方です。そのあなたに息子さんの写真を贈ります！」と言いました。彼らと一緒にわが県の知事がわが家に来ました。Kh.チョイバルサンと一緒にわが家を訪れた大勢の人たちは朝私が目覚めた時にはみな去って行ってしまっていました。

KY：お兄さんと初めてお会いになられた時、どんな話をされましたか？

YA：いえいえ、話なんてしませんよ。当時、私は子どもだったのですよ。何を話すというのですか。当時の私は羊を放牧するだけの子どもだったのです。兄の帰郷時に、兄と母のあいだで、ある1つの話題が持ち上がりました。誰が最初に言い出したのか、私は知りません。「この子を学校に入れたい!」という話になったようです。母が先に言い出したのでしょうか。それで、ある朝、兄は「これからホブド県に行くぞ!」と言って自分の車に私を乗せて出発したのです。

私たちはオブス県の中心地で1泊し、さらに進んでホブド県に到着しました。するとそこにKh.チョイバルサンも随行者たちと一緒にやって来ました。こうして私たちは合流したのです。それで、ホブド県からみなで一緒にウランバートルに向かいました。ただし、道中、私たちは非常に時間をかけて進みました。途中の各郡で住民たちと会い、講演をしながら進んだのです。話の内容はと言えば、モンゴル人民革命党第10回党大会の話だけでしたが。私たちは2週間ほどかけてようやくナーダム開催前にウランバートル市に到着したのですよ。

当時、兄は結婚していませんでした。兄はモンゴル銀行の入った2階建ての建物の2階に1人で住んでいました。私は兄と住むことになりました。兄は当時、地方によく出かけていました。兄が地方に出る時はいつも護衛官が1人付き添っていました。その護衛官は銃を所持していました。それで運転手と合わせて3人になるわけです。1度地方に行くとなると20日間程留守にします。時には1ヶ月にもなることもあります。

私は夏のナーダムの直前にウランバートルに来たわけですが、秋になるまでこんな調子で暮らしていました。食事はすべて自炊です。兄は出張する際に食費をくれました。そのお金で私は食堂でホーショール(揚げ餃子)を買って食べていたものです。当時、1トゥグルグで10個のホーショールが買えたのですよ。物価の安い時代でした。今ではホーショール1個が130から140トゥグルグにもなっているのですから。10個のホーショールを1度には食べ切れません。3つでもうお腹いっぱいになります。残ったホーショールを家に持ち帰り、取り置いて朝と晩に食べていました。

兄が地方に行くとは私は1人でとても退屈でした。それで1階にあるモンゴル銀行をよく訪ねました。大勢の職員がいる銀行でした。それで、その従業員の若者たちと知り合いになったのです。毎日通いました。そうやって彼らと仲良くなって来たころ、彼らは私に書類を渡しては「これをあの人のところに持って行って!」と言いつけるようになりました。私は仕事もなく、暇な人間でしたから、そんな書類をあちこちに運ぶようになりました。そうやって日中はモンゴル銀行の中で書類を持ってあちこち走り回る運び屋になりました。時間も早く過ぎ去るようになり、退屈ではなくなりました。

### 3 ウランバートル生活

KY：初めてウランバートルに来た時の印象はいかがでしたか？

YA：印象だなんて。いなかから上京して来たので知っているものは何1つなかったわけですよ。人の多い町だったように記憶しています。

1940年、つまり独ソ戦争の前の年に私はウランバートルにやって来ました。そんなふうに住らしていたところ、兄ツェデンバルがある日「俺の勤務していた専門学校にお前を入れる！」と言いました。私は何も言えませんでした。それからまもなく兄はまたもや地方に行ってしまいました。するとある日、兄の運転手がやって来て「これから車に乗ってお兄さんの学校に行くぞ！」と言いました。それで私はその車で兄の学校に行きました。兄が勤務していた学校は財政専門学校です。モンゴル銀行から財政専門学校まではかなりの道のりでした。学校に到着しましたが、教務主任の先生がいませんでした。それで、運転手と私は教務主任の先生が来るのを少し待ちました。でもあらわれませんでした。それで2人して帰宅することにしました。帰り道、ブンブグル・ノゴーン・テートル（まるい緑の劇場）まで通りかかった際、私は運転手に「僕はさっきの学校には通えないよ。あの学校はうちからとても遠いよ。僕は「まるい緑の劇場」とモンゴル銀行のほかはどこも知らない田舎者だよ。こんなたくさん建物の中をととても目的地までたどり着けないよ」と言いました。そうして、その日から幾日かが経ちました。

そのころ、兄には3人の運転手がいました。ある日また別の運転手がやって来て「今度は俺が連れて行く。ほかの学校と一緒に行こう！」と言いました。そして、またもや彼の運転する車に乗って行きました。そうやって車でずっと行って、ある山の頂上付近にまで行きました。そしてまた、ある建物の中に入りました。みな格式ばって何かが違うのです。軍隊の学校に来ていたのです。私はそこで四則計算をさせられました。モンゴル文字も書かされました。そうやって試験をしたのです。その学校には長いあいだいました。それで、その学校の先生がたと会いました。たくさん先生たちと会いましたよ。それで「もうこれで終わりかな」と思って扉の方に行こうとしたところ、ある人が「帰るにはまだ早い！その壁の前に立ちなさい！」と言いました。それで、その人の指し示した壁の前に立ちました。その壁には赤いリボンが張られていました。そのリボンに私の身長が届かなければならなかったようです。でも、私の身長は足りませんでした。すると、その先生は「この子の身長は足りないじゃないか。やめよう。やめよう」と言いました。そういうわけで、私は軍隊の学校に落ちてしまいました。その日から私の兄は「モンゴル銀行に近い学校を探してそこに入れろ」と命令したようです。

モンゴル銀行は今の建物と変わらないのですよ。ある日、また別の運転手が来ました。私は彼の運転する車に乗って出かけました。モンゴル銀行の入った建物の西の、とても近い所に「ウンドゥル・ホルショー（のっぽの組合商店）」と呼ばれる大きなお店

がありました。その「のっぽの組合商店」の脇を進むと、前方に「商業専門学校」という看板が目に入りました。私は車を止めさせ「ここに入ってみよう！」と言いました。こうして私たち2人は校舎内に入って行きました。その学校でも試験がありました。8月25日ごろにその試験を受けたように覚えています。

授業は9月1日からですよね。私と一緒にいった運転手は「この学校は協同組合連盟の附属の学校だ。協同組合連盟はモンゴルのありとあらゆる商取引を担う組織だよ」と教えてくれました。その日、運転手と私は試験を終えて帰りました。翌日、再度その学校を訪れました。学校側は「どのクラスに入りたいのか」と聞いてきました。ところが、「物流科」といったようにたくさんのクラス名があるのですよね。私はいなかにいる時、計算をするにはそろばんを使うということは知っていました。家畜頭数調べの際に地方ではそろばんをよく使っていたのです。私は家畜頭数調べに駆り出されていましたよね。家畜頭数を調べに来たわが郡の「会計係」たちはそろばんをパチパチ弾いて計算をしていたわけです。私自身はでも当時そろばんの使い方を学んでいませんでした。そして、彼らのように計算の仕方を学びたいと思っていたのでしょうか、きっと、よくわかりませんが。それで、私は「そろばんを弾くクラスに入る」と言ったのです。先生がたは笑っていました。こうしてその学校に入学することが決まったのです。

他の生徒たちは10年制の学校を卒業して来ていました。私とは言えば10年制の学校も卒業していないでしょ。故郷にいる時に「臨時学校」にふた夏だったか通ったぐらいで。そういうわけで学校側は私を本科には入れずに準備学級に入れました。そうして1年間、準備学級で勉強してから本科を4年間やって卒業したのです。1944年の春に学校を卒業し、「協同組合連盟」に就職しました。私は「口座監査」という仕事をしていました。協同組合連盟では3年間勤務しました。

## 4 モスクワ留学

YA：1946年秋、協同組合連盟より3名をモスクワの商業大学に留学させることになりました。そのうちの1人に私が選ばれたのです。そういうわけでモスクワに行きました。モスクワに行き、モンゴル大使館で何泊かしました。そしてモスクワの商業大学で学ぶことになりました。

ところが1つの問題が浮上して来ました。「10年制学校を卒業していない人は本科には入学させられない」という回答が来たのです。その学校の近くにソ連の協同組合連盟の本部がありました。私はそこにモンゴル大使館の職員と一緒に行きました。そして、学校の担当者と会いました。その人は「少し待っていてください。数日のうちに回答します」と言いました。それで、そこから回答が来るまで何日か待ちました。すると「商業専門学校の準備学級に入学させる」という決定が下りました。そして、モスクワから

20キロほど離れたところにある、商業専門学校準備学級で学ぶことになりました。

私と一緒にモスクワに来たうちの1人は故郷では原材料の専門家でした。彼は「絶対に原材料科に入る。ほかの科には入らない」と主張したのです。が、私たちの行くその学校には「原材料科」はそもそもありませんでした。それでその人は「原材料科」がある学校に行くためにイルクーツクに行ってしまいました。もう1人の人は「会計の専門家」でした。その人もまた「絶対に会計科に入るのだ」と頑張っていました。しばらくして、学校側は彼の会計科入学を認めました。こうして諸々のことが落ち着いてきました。各々がそれぞれの学校で学び始めてしばらくしたころ、例の「会計科」に入学した人は体調を崩し、帰郷してしまいました。それで私はモスクワに1人残ったのです。そのころ、私は商業専門学校の学生寮、それは学校の近くにあったのですが、そこに住んでいました。学生寮からモンゴル大使館に私はときどき通っていました。半年ほど学んだころに1度モンゴル大使館に行ったことがありました。すると大使館の書記官が「もう君はあの専門学校に行く必要はない。衣服と本を持って大使館に早く来なさい」と言うのです。私はすぐに宿舎に戻り、身支度を整えて大使館に行きました。すると、大使館の書記官は「今からこの宿舎に住みなさい」と私に家族用の1部屋を与えてくれました。その部屋にいた家族がどこに行ってしまったのかはまったくわかりません。モンゴルに戻ったのかもかもしれません。そういうわけで私はその部屋に1人で住むことになりました。翌年の秋までそこで過ごしました。

翌年の秋、8月初旬だったかと思います。ある日、大使館の書記官が「これから2人で商業大学に行こう」と言いました。そして、その大学で私たち2人は学長と面会しました。私の入学願書を大使館で発行して持って行ったのです。学長は私の入学願書に目を通しました。そして「少し待っていなさい。いずれ回答をしよう」と言いました。その後、数日して大使館の書記官は「もうすぐ商業大学の入学試験が始まるようだ。あの大学にはソ連の全共和国から若者たちが試験を受けにやって来るのだ。君は彼らと一緒に入学試験を受けるのだぞ」と言いました。そんなこんなで私は試験の準備をしなくてはならなくなっていました。私は8年制学校すらも卒業していない人間でしよ。当時、ソ連のモスクワでは大学に留学しにやって来たモンゴル人の子どもたちは必ず大使館に足を運んでいました。そのうちの1～2人と知り合うことができました。彼らはみな10年制学校を卒業していたのですよ。それで、何人かに数学を教えてもらいました。

そうこうしているうちに商業大学が入学試験受験者のための「復習セミナー」を開催し始めました。大使館の書記官が私をそのセミナーに参加させてくれました。そのセミナーでは入学試験にどの科目が必要かを事前に教えてくれました。それで、私はどんな試験を受けなければならないかを知ることができました。そしてまた、同じ試験を受ける子どもたちと知り合うこともできました。彼らはソ連邦の構成国である共和国から来

た子どもたちでした。そうやって勉強して私は主要科目の試験で好成績を収めることができました。

そうして最後に「ソ連共産党史」の試験を受けることになりました。ほかの子どもたちはその試験を故郷にいるあいだに受け終わっていたようです。試験日に指定された日がやって来ました。先生が私にいくつかの質問をしました。それに私は答えました。すると先生は「個人的に家畜を所有していますか」と聞きました。「私個人は家畜を持っていません。両親には自分の家畜がありました」と私は答えました。

すると先生は、「クトー・トウィ・タコエ? (お前は一体何者だ?)」と聞きました。私は答えようにも答えられませんでした。「お前は自営業者なのか? と聞いているのだろうか。自営業者をこの学校には入学させないのだろうか」と心の中で私は思っていました。「自営業者」という言葉を「エディノリチニク」と訳することもできます。すると、また別の先生が再び「クトー・トウィ・タコエ?」と聞くではありませんか。それで私は返す言葉がなく、突っ立っていました。

すると、私と一緒にその試験を受けていたある女の子が「マルキシスト! (マルクス主義者!)」とささやくのが耳に入って来ました。それで私は「ヤー・マルキシスト! (私はマルクス主義者です!)」と大きな声で答えました。すると、「オー・モロデーツ! (おお、たいしたやつだ!)」と私の「ザチョトゥナーヤ・クニーチカ (成績表)」にすぐさま点数を書き込みました。もし私が「エディノリチニク」と答えていたらどうなっていたでしょうか、まったく知るすべもありません。先生たちは結局私に「今、現在どんな思想教育を受けているのか」と聞いたようです。

当時、私の学校には帝政ロシア時代の先生たちが教壇に立っていました。そうした人たちこそが「商業」を本当の意味で理解し、知っていたわけですよ。国際貿易の問題にしても、イギリスの貿易を例にとりて説明していました。国際市場における価格がどのように決まるかについても話してくれました。「価格はイギリスの金の価格によって決まります。石油の価格もそれにより決まります。農畜産物の価格も金の価格に左右されるのです。イギリスのポンドは世界で最も価値のある兌換貨幣なのです」といったように話すのです。私の学校の先生たちはイギリスの金の価格に関する情報を私たちにくれました。

戦後まもない時期だったので私たちがモスクワで留学するのはとてもたいへんでした。大学の学生には店頭でパン500グラムしかくれませんでした。それ以上は分け与えてもらえませんでした。そんなノルマが決められていたのです。私たちには「食糧配給券」が支給されていました。

当時、ソ連では食糧事情が悪かったため、私たちだけでなくすべての人びとが「食糧配給券」を持っていたのです。その券で1人当たりに支給される食糧の量が決められてしまっていたのです。私と一緒にその学校に入学したモンゴル人が4人いました。そ

のうちの2人は戦前にその大学で学び、開戦と同時に故郷に帰った人たちでした。それで、終戦と共に戻って来て再入学したのです。畜産分野の原材料を輸出する「ツァーガン・エレグ中継基地」というものがわが国にはありました。私たちはその「ツァーガン・エレグ中継基地」からバターを1樽仕入れました。それを列車で運んでモスクワに持って来たのです。そのバターを私たちは学生寮の窓のところに置いていました。それで、例の500グラムのパンを買ってバターを塗って食べていました。それ以外に食糧はなかったので、それだけで生活していました。食糧事情が少し改善されてくると「食糧配給券」はなくなりました。

私たちはモンゴル大使館から奨学金をもらっていました。学生1人当たり500ルーブル以上もらっていたように記憶しています。当時、モスクワには全部で30人ぐらいの人が留学していたと思います。M.V.ロモノーソフ記念モスクワ国立総合大学、外国語大学、通商大学といった学校にモンゴル人が留学していました。通商大学では国際貿易に関係する授業ばかりがあったかと思われます。私の通っていた商業大学は国内における商業取引について教えていました。でも、両者の違いはとくにありませんでした。授業内容もだいたい同じでしたから。「どうやってお金を得るか。得たお金をどうやって使うか」ということが中心になるわけでしょう。そうした授業を帝政ロシア時代の教授たちが主に教えていたのです。中には非常に高齢になられていた先生もいました。彼らは市場における関係を1つの理論としてではなく、実生活において知り得ていた人たちなのです。市場経済に関する理論をも彼らは本当の意味で研究した人たちなのです。彼らはそして、価格と為替の問題を非常に良く知っていました。彼らは、資本主義も社会主義も良く知っている人たちでした。

I L：もっぱら社会主義革命以前の時代の市場経済について教えていたのですか？

Y A：いえ、いつもそうだというわけではありませんでした。先生がたは当時置かれていた新たな目標についても教えてくれていました。つまり、私たちに新旧両方の時代の経済システムを教えてくださいと理解していいと思います。先生がたはみな英会話が上手でした。私たちにも英語を教えてくださいました。

## 5 協同組合連盟にて

Y A：卒業、帰国後10年以上は外国と関係する仕事はまったくしていませんでした。帰国後、私は協同組合連盟に就職したのです。協同組合連盟はモンゴル国内における商業取引を担当していました。というのも、1960年にモンゴル人民革命党中央委員会の総会が開催され、貿易問題を担当する独立した貿易省の設置に関する決定が下されました。それで、わが協同組合連盟は国内における商業取引のみを扱うようになったのです。貿易省の輸出担当副大臣にはL.ジョールジャブという人が任命されました。彼が

私を自分の省に引き入れたのです。そして、彼は私を輸入局長に任命したのです。こうして私は貿易省にやって来たのです。

貿易省にいた時、私は「ハトガル税関」に出張しました。この税関からわが国は家畜を生きたままソ連に輸出していたのですよ。ハトガル税関で何日か仕事をしてウランバートルに戻って来ると、肝臓がひどく悪くなってしまいました。それでウランバートルで長いあいだ療養して治しました。ところが、その翌年にまた肝臓が悪化したのです。医師たちは私に「チェコスロバキアにある〈カルロビバリ〉という温泉地の温泉水を3年間続けて飲まなければ治りませんよ」と勧めるようになりました。当時、在ハンガリー・モンゴル大使館に通商顧問が1人勤務していました。その人は任期を終えて帰国して来ました。それで、私が彼の代わりに通商顧問に任命されたのです。そういうわけで私はブタペストに5年間住んだのです。その間、チェコスロバキアの「カルロビバリ」という有名な温泉療養地で3年間暮らし、温泉水を飲みました。私の肝臓はこうして治ったのです。未だに再発していないのですよ。

I L : 鉱泉水はアヨーシさんの病気にとっても効き目があったのですね。

Y A : そうなのです。効果は非常にありました。まず、温泉療養地の医師たちに診察してもらったところ、「アヨーシさん、毎日温泉水を飲む必要がありますね」と言われました。それで毎日、温泉水を飲んでいました。「カルロビバリ」の温泉はとても変わっているんですよ。13種類の温泉が湧き出ているのです。

I L : 温泉水の味はどうでしたか？それぞれ違うのですか？

Y A : 味はとくにありません。中にはちょっと苦く感じるものもあります。ほかの味はまったくありませんね。水の味がするだけです。私はその温泉水を朝昼晩と飲んでいました。

I L : 1960年に貿易省が設立される以前は協同組合連盟という機関は国内商取引も外国との貿易も担当していたのですか？

Y A : そうです。1960年に協同組合連盟は管轄にあったすべての「中継基地」を独立した機関となった貿易省に移しました。当時は「ツァーガン・ノール」と「ハトガル」という大きな中継基地がありました。そうした基地を通じてわが国の家畜をソ連に輸出していました。ドルノド県には「中央物品基地」がありました。モンゴル国内の商取引を協同組合連盟が担当するようになりました。やがて協同組合連盟は閉鎖され、その代わりに「商業調達省」が設置されました。この省はモンゴルのありとあらゆる商取引と原材料の調達を担当するようになったのです。

I L : 当時、モンゴルはどんな国と通商関係にあったのですか？

Y A : 当時、貿易省の管轄にある「商業会議所」の会頭はナワーン・ユンデンという人でした。彼はかなり若い時にドイツの大学を卒業した人でした。ドイツ語が堪能でした。私は貿易省の輸入局長でした。「モンゴル輸出社」には家畜の毛に詳しい若い良い

専門家がありました。名前は思い出せませんが、ナワーン・ユンデンと彼と私の3人はいつも西側資本主義国に行っては貿易をしていました。

当時、スイスのドイツ国境近くに「サンドズ」という大きな会社がありました。その会社には非常に大規模な附属工場がありました。その会社は皮を加工する際に非常に重要な化学薬品を製造していたのです。世界各国がその会社から皮革製品を生産する上で必要な化学薬品を購入していたのですよ。私たち3人はまず初めにその会社を訪問しました。同社の幹部と会い、工場も視察しました。それで皮を加工する際に使用する化学薬品を購入する契約を結びました。そうやって私たちは初めてその会社から200トンの化学薬品を購入する契約を結んだのです。モンゴルの皮革工場は同社の化学薬品を今現在も使用しています。その会社はスイスの会社です。貿易省が設置されて以降わが国は世界30カ国以上の国々と貿易を行ってきました。その時から資本主義国と通商関係を持つようになったのです。

わが国は資本主義の国々に山羊からとれるカシミアや羊毛を輸出していました。わが国の羊毛はよく好まれました。何故なら西側諸国の繊維工場は化学的に作り出した合成繊維を羊毛に混ぜて新種の糸を生産していたのです。たとえば、私の勤務していたハンガリーではわが国から購入した羊毛を化学繊維と混ぜて素敵な糸を生産し、それで男性用のスーツ生地を生産していたのです。その生地をさらに西側諸国にドルで売っていたのです。

IL：現在、モンゴル産の羊毛を買い付けるところがないため、牧民たちは羊毛をほぼ捨てている状況にあります。非常に低価格で時おり中国商人たちが買うようになったようですが。

YA：本来なら産業貿易省が羊毛の輸出をちゃんと計画立てて行わなければならないのです。羊毛を買う国や企業はたくさんありますよ。一方、1990年以降、わが国の家畜は私有化されましたよね。そのために羊毛を刈り取る作業を組織的に行うのが難しくなったのかもしれない。

私たちが貿易省に勤務していたころは、管轄の機関として輸入専門が3つ、輸出専門が1つと4つの大規模な「産業通商ネグデル」がありました。「モンゴル輸出ネグデル」を通じてわが国は物品を国外に輸出していました。「皮革・毛ネグデル」という非常に大きなネグデルもありました。「モンゴル機械輸入ネグデル」というとても力のあるネグデルもありました。モンゴルは自国に必要なあらゆる機械や設備をこのネグデルを通じて注文し、購入していたのです。広く需要のある物品や製品の輸入を担当する「物資インボックス」というのもありました。それから燃料や油製品の輸入を担当する別のネグデルもありました。1990年以降こうした「産業通商ネグデル」はすべて消滅してしまいました。

私がハンガリーで「通商代表」として勤務していたころ、ハンガリーの貿易省が開催

したパーティに1度出席したことがあります。パーティ会場で私はハンガリー外務省の専門官と近況等の立ち話しをしました。もともとその人のことは知っていたのです。彼は、

「小腸を輸出する計画は貴国にありますか」と聞いてきました。

「まあ、希望や意向としてはあるけれど、今のところわが国からそういうものを買いたいと希望を出して来た国はないですね」と私は彼に答えました。

すると彼は、

「それならアヨーシさんにある人を紹介してあげましょう。その人は〈小腸の専門家〉なんです。その人、小腸の貿易に非常に関心を持っているのです。スイス人なのですがね」と言うではありませんか。

「ああ、そうですね、そうしましょう。その方にお会いしましょう。その方はブタベストによく来るのですか?」と私は聞きました。

「来ますよ。月に1~2回来ますね」と彼は答えました。

その話はそれで終わりましたが、その話があった時からしばらくして彼は私に電話をかけてきました。

「スイスから例の小腸の専門家がやって来てゲレス山にあるホテルに泊まっていますが、いつお会いできますか?」と。

ハンガリーにあるモンゴル大使館はゲレス山にありました。大使館の近くに1つの大きなホテルが建っていました。スイスからやって来たその人がわが国の大使館の近くに泊まったように思われました。それで1日経って私は昼休みに彼の宿泊したホテルに行きました。私はドイツ語の通訳を1人連れて行きました。そうして、その人と会い、昼食を共にし、かなり話をしました。彼は「小腸の問題でモンゴルに行きたいです」と言っていました。それで彼と会ったあと、私は貿易省と連絡を取りました。すると、わが省のガンジョールジャブ輸出担当副大臣は、

「その人の出費はすべてわが国が負担しよう。いつモンゴルに来られるか聞いて早急に返事をよこすように」と言うではありませんか。それで私は彼と再び連絡を取りました。すると彼は、

「いつでもかまいません。今、行ってもいいですよ」と言うのです。それで、私は彼をモンゴルに入国させる手続きを取りました。ブタベストからモスクワに入り、そこからウランバートルにやって来ました。猛スピードでやったのですよ。私自身も一緒について行きました。そして、私たちは彼にウランバートルの肉コンビナートを視察させました。肉コンビナートを訪問した時、彼はモンゴルの専門家たちに多くの助言を与えてくれました。小腸の分別方法について良いアドバイスをくれたのです。そうして彼は年に2回、モンゴルに来るようになりました。私たちは1964年から2000年まで協力して働いてきました。彼の名はシトウンと言います。モンゴルから小腸はこうして輸出され

るようになったのです。

初回は5万頭分の小腸を供給する契約を結びました。この数字はその後も伸び続け、最終的には30万頭分にまでなりました。わが国は小腸をいつもドルと引き換えに売っていました。西側諸国では小腸を医療に用いるのです。外科手術の際に縫合用の糸として使用するのだそうです。わが国から主にそういう目的で小腸を購入していたのです。羊の小腸だけを買うのですよ。山羊の小腸は医療向きではないのだそうです。私たちは2000年まで小腸を西側諸国に輸出していました。私たちのほうは西ドイツから薬品を購入していました。わが国の貿易にはドルがとても必要でした。

## 6 貿易の専門家

IL：その当時、資本主義国と貿易するにあたってわが国の「イデオロギー」は障害になっていましたか？

YA：わが国の「イデオロギー」は外国との貿易に障害となっていたかもしれませんが。よくはわかりませんね。わが国は1960年代から資本主義国と貿易を開始しましたからね。

KY：ハンガリー・モンゴル間の貿易はどのような感じだったのですか？

YA：私は在ハンガリー・モンゴル大使館で通商代表を5年間勤めました。ハンガリーは自国で郵便切手を印刷し、輸出していました。わが国はハンガリーに「モンゴル切手」を売っていました。ハンガリーは自国通貨で「モンゴル切手」を購入していましたが、代金のうち30%をドルで支払っていたのです。

ハンガリーに赴任してから私はそれを再度計算しなおして見ました。そうしたところ、こうした商売がとても赤字の多いもののような気がしてきてしまいました。ハンガリー側が30%支払うべきドルの支払いを時どきちゃんと払っていないことがあったのでしょう。それで、私たちは「モンゴル切手」を独自ルートで売ったほうが、利益があるということで意見が一致したのです。それでそのことを貿易省に報告しました。貿易省で協議が行われ、私たちの意見が承認されました。それで私はハンガリー側にそのことについて報告しました。こうして両国間で協議が行われることになりました。協議にはわが国の通信省副大臣、そしてモンゴル大使が出席しました。ハンガリー側は当初、わが国の意向を受け入れてくれませんでした。それで協議が長引き3日間も続いたのです。が、最終的に彼らは受け入れてくれました。

しかしながら、ハンガリー側には未売却の「モンゴル切手」がたくさん残っていたのですね。ハンガリーと結んだ契約には、何年に何枚の切手を引き渡したかがはっきりと記載されていたのですよ。それで、残っている未売却の「モンゴル切手」すべてをわが国が引き取ることになりました。未売却の切手を早急にモンゴルに輸送しました。それ

以後、私たちは「モンゴル切手」を自分たちで売ることになったのです。

「モンゴル切手」は素敵な切手ですよ。テーマも絵柄もとても素敵です。「モンゴル切手」は外国の切手収集家たちのあいだでも有名でした。今でもそうだと思います。以後、「モンゴル切手」は世界20カ国以上に出回るようになりました。

そんなことがあったあともなく、アメリカのビジネスマンが「金の切手」を作るという宣伝を出しました。私たちはその「金の切手」を印刷する会社の副社長をモンゴルに招待しました。本来であれば、外国から人を招待する際、私たちはモンゴル人民革命党中央委員会と事前話をつけておかなければならない規則になっていました。中央委員会に事前に訪問者の目的や国籍等を報告するのです。そして中央委員会から招待に関する可、不可が伝えられるのでした。ところが、その時私たちはその規則を破って直接招待してしまいました。副社長は私たちの招待状を受け取るやすぐにやって来ました。私はその当時、貿易省の副大臣を務めていました。それで私たちは彼と交渉をしました。彼は狩猟をテーマとした切手に非常に関心を寄せていました。わが国はトラ、ユキヒョウ、シカ、牝の野生羊、野生山羊といった狩猟動物をテーマにした数多くの切手を印刷していました。それで彼にそういった種類の切手を見せました。

彼は「〈モンゴル切手〉で〈金の切手〉が作れそうだ。われわれは20オンスの金で切手を作るつもりだ。アメリカの富裕層はこうした切手をよく買うのだ。モンゴル側にも何枚か取り分を与えよう。われわれが売って、モンゴルにその代金を支払うことも可能だ」と言うではありませんか。それで、初回は狩猟をテーマとした30枚の切手を彼の注文で私たちが作ってあげることになりました。ところが、その時、笑えるような問題が浮上してきました。私たちの取り交わした契約を承認してくれる人がいなかったのです。通商問題を担当するモンゴル人民革命党中央委員会の書記や閣僚会議の副大臣たちは社会主義国から成るCOMECONの会議に出席するためみなモスクワに行ってしまったのです。それで、私たちの契約を承認してくれる人がいなくなってしまったのです。

IL：当時、貿易省が外国と取り交わした契約は、必ずモンゴル人民革命党中央委員会が承認しなければならない規則があったのですか？

YA：ええ、もちろんですよ。どこの国と、どんな協定を結ぶのかについて私たちは事前に報告していたのです。それに対して、党中央委員会からさまざまな要求がなされていました。実際に何が必要とされ、それがどういうわけなのか私は知りませんが、たくさんの書類を作成しなければなりません。党中央委員会の承認を得て契約を結ぶわけです。「金の切手」に関して取り交わした契約については、報告する人がいなかったわけです。

すると、D.マイダル閣僚会議大臣がウランバートルにいるという情報が入って来ました。マイダル大臣はモスクワの会議に出席せずいたのです。当時、マイダル氏は自然環境と狩猟動物の両方を兼務して担当している方でした。それで、私はマイダル氏と

会いました。私はマイダル氏に面会の理由を説明しました。貿易省の職員が私のために「金の切手」の経済的利益を算出してくれたのです。マイダル氏は算出された数字も見ました。ところが、

「これは私が解決する問題ではない。お兄さんのY.ツェデンバルと交渉すべきだ！」と言うのです。それで、私たち2人は私が持って来た書類すべてを持って兄の執務室に行きました。ちょうどドアのところまで来た時、マイダル氏は「君は、ここで待っていなさい！」と言って私を1人置いて中に入ってしまった。私は兄の執務室のドアの前でマイダル氏を待ちながら座っていました。すると、しばらくして兄の秘書官の電話が鳴りました。秘書官は電話を取りました。そして、

「Y.ツェデンバル氏がお入り下さいとのことですよ！」と言いました。それで私は兄の執務室に入りました。兄とマイダル氏が私の渡した書類すべてを広げて見ていました。私が部屋に入ると兄は、

「お前の話はいったいどういうことなのだ。お前たちは「金の切手」をアメリカで印刷してアメリカで売るようだが。それで年間どのぐらいの利益が出るのだ？」と聞いてきました。

「利益の計算については貿易省でよく話し合っておきました。お渡しした書類上にすべての見積もり、1年間に得られる利益等すべて書かれていますよ！」と私は兄に言いました。

すると兄は

「そのアメリカ人たちは今どこにいるのだ。モンゴルに来ているのか？」と聞きました。

「ええ、もうウランバートルに来ています。彼らと取り交わした契約の承認を取りつけようとしたら、承認してくれる人がいなくて。担当できる人間はみなモスクワの会議に出席してしまっているのです！」と私は答えました。

「ああ、そうか！それならお前たち、契約を結んでしまえ。それで、そのアメリカ人たちに対して豪華な歓迎会を開いてやり帰国させろ」と言いました。その言葉を聞いて私は本当にうれしくなりました。

**KY**：あなたは貿易省の仕事で何度もお兄さんのところに行っていたのですか？

**YA**：いえ。それまで1度も行ったことはありませんでした。兄はどんな仕事のことで私を執務室に入れたことはありませんでした。兄は私を仕事のことで相手にもしなければ話もしませんでしたね。

この「金の切手」はとても利益が出たのです。アメリカのその企業は私に自分たちの作った「金の切手」のデザインのいくつかを送ってくれました。今でも私はそれを保管しています。「モンゴル切手」の商売は儲かりますよ。わが国は今でも「モンゴル切手」の貿易を続けています。

## 7 貿易省副大臣

**KY**：その当時は、通商におけるあらゆる問題を、貿易省を通じて解決していたのですか？

**YA**：そうです。わが国の工場や企業は外国の機関と直接関係を持つ権利を有していませんでした。必ず貿易省を通じてそういった機関とつきあわなくてはなりませんでした。貿易省を通じて必要な機械や設備、そして生産を遂行するのに必要な原材料や資材を注文して外国から購入し、また貿易省を通して自分たちが生産した品物を外国の市場に輸出していました。貿易省は外国との取引だけを担当していました。国内の商取引については商業調達省がやっていたからね。

**KY**：ハンガリーでは通商代表として勤務されていたようですが、その後はどちらに勤務されたのですか？

**YA**：ええ、ハンガリーで5年間働いて、私のそこでの任期は終わりました。それで、モンゴルに帰る準備をしていたら、突然、私はモスクワ在住の通商顧問に任命されてしまいました。それでモスクワで7年働いたのです。モスクワからモンゴルに戻って来て貿易省副大臣になりました。「金の切手」は私が貿易省副大臣に任命されてまもないころにした仕事です。ハンガリーで働いていたころ、切手についていろいろな知識を身につけたのです。切手に詳しいハンガリーの有名な教授がいてね。私は彼を大使館に呼んで切手についての講義をしてもらっていました。ハンガリーのモンゴル大使館にはわが国の偉大な学者であるビャムビン・リンチェン氏の娘さんが勤務していたのです。彼女はハンガリー語がたいへん上手でした。それで私はその教授の講義をB.リンチェン氏の娘さんに翻訳させそれをすべて読みました。

**IL**：「モンゴル切手」は何年から印刷されるようになったのですか？

**YA**：かなり昔から作られていたようです。ボグド・ハーン政権のころから作られるようになったのでは。そうですね。そんな昔から作られ始めたと思います。1921年の人民革命のあと、D.ツェレンドルジ首相の時代に「モンゴル切手」はすでにありましたから。そのころ、Kh.チョイバルサン氏の顔写真がデザインされた小さい切手が作られていました。今はもう当時の切手は手に入りませんね。外国の切手収集家たちに「モンゴル・ショーダン（モンゴル郵便）」はどんな意味なのかとよく聞かれます。それから、切手に表記されている「ムング（通貨単位）」という言葉についても「これはどういう意味なのか」とよく聞かれますね。

**YA**：私、くだらない話をしていますか？

**KY**：いえいえ。とても興味深いお話です。

**YA**：貿易省の副大臣という仕事はとてもたいへんなものでした。省に勤務している勤務時間を私が直接出勤簿に書き込まなければなりませんでした。誰かが遅刻して来るよ

うなことがあれば直接私に係ってくるのです。

省内で出てくるさまざまな中傷についても私があいだに入って仲裁していました。職員2人の間でなんらかのいざこざが起きれば止めに入らなければなりませんでした。女性が多いとたいへんですよ。省内のことについて大臣は係りません。私になんとかしなければなりませんでした。

その当時、輸入関係で早急に解決しなければならない問題が常に浮上していました。わが国が外国に注文した物品が契約に定められた期日に届かないことがよくあったのです。一番たいへんだったのは燃料の輸入でした。計画上の期日より遅れれば、国内の消費者に燃料切れの危険が及びますよね。そうなれば交通機関が麻痺しますよね。当時は、貿易による利益はすべて国庫に入っていました。そのお金は財務省が管理し、調整していました。貿易省でお金が必要になった場合、財務省からもらいます。財務省は貿易省にお金を分配する際、それほどケチりませんでしたよ。今は状況が違うと思います。民間企業は直接、外国と取引しています。

私が貿易省の副大臣だった時、ブルガリアで国際会議が開催されました。その会議に出席するメンバーをモンゴル人民革命党の中央委員会が決めていました。私は代表団の団長に任命されました。それで私は代表者たちを引き連れてその会議に参加しました。すると、その会議でブルガリア、東ドイツ、ユーゴスラビア、モンゴル、ポーランドの5カ国の貿易省副大臣に「水星」賞が授与されたのです。そのことを会議の主催者側が事前にモンゴル人民革命党中央委員会に知らせていたのです。私は貿易省に入省した時から、資本主義国との貿易を担当してきました。わが国と貿易があった西側の資本主義国は英国、フランス、西ドイツ、スイス、イタリア、ベルギー、スウェーデンなどでした。

I L：わが国はフィンランドやスウェーデンとはどんな分野の貿易を行っていたのですか？

Y A：わが国はフィンランドから医療器具を購入していました。わが国には心臓外科の有名な医者でD.シャグダルスレン博士という人がいましたよね。D.シャグダルスレン氏が心臓手術に必要な器具を購入していたのです。私はモスクワで通商代表をしている時にフィンランドによく行きました。

ある時、東ドイツの通商代表をしていたS.ゴンゴルと一緒に出かけました。彼は良質の紙を求めていました。私たち2人はフィンランドからスウェーデンに入りました。そこで良質の紙を輸入する契約を結びました。その紙を生産する会社の貿易担当マネージャーは年配の人でした。名前はもう思い出せません。その人と私たち2人は紙の売買契約を結んだのでした。そしてその夜、レストランで一緒に食事をしました。ゴンゴルは3つの杯にそれぞれ異なるお酒を注ぎ「どれを飲みますか」と言いました。そのマネージャーは「強いのを飲もう」とウイスキーの入った杯を取りました。私

は赤ワインの入った杯を取りました。そして3人で乾杯して飲みました。

すると、そのマネージャーは「あなたがたは本当にいいねえ」と言うではありませんか。私たち2人はその言葉が良くわかりませんでした。「何がいいのですか」と私たち2人は彼に殆ど同時に聞きました。「あなたがたはチンギス・ハーンやバトゥ・ハーンといった世界で最も有名な人たちの国から来た人であり、また彼らの末裔ではありませんか。我々は生まれ、そして死んでいきます。でも、誰もそんな名声の頂上に達したことはありません」と言うのです。その言葉は今でも思い出されます。

ヨーロッパの人びとはチンギス・ハーンやその孫のバトゥ・ハーンについてたいへんよく知っていますよ。でも、私たちはその当時、彼らのことについてはそんなに知らなかったのです。中等専門学校ではほとんど耳にすることはありませんでした。両親や友人や知人のあいだで伝えられた話の中でしかチンギス・ハーンのことについて聞くことはありませんでした。歴史書を読んでみると確かにチンギス・ハーンの造った大モンゴル国は世界史上最も勢力のあった国だったのですねえ。チンギス・ハーンの兵は中央アジア全体を勢力下に置き、南下してインドまで達していたのですよね。バトゥ・ハーンは中欧全体を支配していました。驚くべきことですよ。

私は貿易省副大臣時代にインドのデリーで開催された国際会議に出席したことがあります。デリーのモンゴル大使館にはヒンディー語が上手な若い子たちが勤務していました。彼らに通訳させてその会議に出席したのです。私自身も英語で出席者たちと話しました。もう英語はすっかり忘れてしまいましたね。英語は使わないので本当に簡単に忘れてしまいました。

会議後、かの有名なタージ・マハール廟を見ました。タージ・マハールは世界の7不思議の1つでしょ。ユネスコはタージ・マハールを「世界遺産」に登録しました。赤や緑の大理石で建立されたその廟を見ていると、人類の知恵や技能に対して崇めるような不思議な気持ちになりました。

タージ・マハールの建設の歴史は聞けば面白いですよ。タージ・マハール廟はモンゴル人の歴史と関わりがあるのです。タージ・マハール廟を建てさせた王はモンゴル系なのです。その王の後は13人目の子どもを産む際に亡くなったそうです。その王は自分の愛する妻の思い出にとタージ・マハール廟を建てさせたという歴史があるのだそうです。そして「我を妻の亡骸の隣に埋めよ」と命じたのだそうです。タージ・マハール廟には今、その王と後の遺体が収められているのだそうです。本当にすばらしいものですよ。

私たちは常に今のように小さな存在ではありませんでした。私たちには世界的規模の帝国を造った歴史があるのです。国家というものほど、経済力が強く、広大な国土があり、国民の生活が豊かであることを願いますよね。でも、歴史上1度でもそうであった国はいったいくつあるのでしょうか。願うことと、それを実現できることは同

じではないのですよね。「チンギス・ハーンの造り上げた大モンゴル国の時代に世界の交易や文化が劇的に発展する条件が初めて生成された」と学者たちが書いたり、話したりしていますよね。大モンゴル国の時代は多数の宗教が平和的に共存していました。また国境というものがありませんでした。多数の民族や国が1つの行政府のもとに置かれるようになったので、交易も商業も自由になり、栄え、そして人びとは自由に往来することができるようになりました。私たちは世界の発展史をそのように変えたのです。ヨーロッパ在勤時代、そのことについて人びとが非常によく知っているように見受けられました。でも、私たちモンゴル人自身は、そのことについて知りませんでした。イデオロギーのせいでしょうか。まったく分かりません。私たち自身はそうした歴史に関する知識が本当に少ないのです。

I L : 「ゴビ」コンビナート建設前、モンゴルはカシミアをどういった国に輸出していたのですか？

Y A : わが国のカシミアはソ連やスイスに輸出されていました。時おり、西ドイツが購入することもありました。当時、カシミアは「モンゴル輸出社」を通じて国外に輸出していました。貿易大臣にD. ゴムボジャブ氏が就任してから、貿易がたいへん活発になったのです。大臣自身が貿易の専門家で、外国との取引についてはとても知識のある人でした。外国へ出張する際、大臣に出張の内容を報告するという規則がありました。ゴムボジャブ大臣は最終的にはモンゴル人民革命党中央委員会政治局のメンバーにもなり、貿易担当書記に選出されて長く勤められました。

## 8 私生活

K Y : さて、あなたのプライベートな生活についてお話ししたいと思います。ご結婚は何年ですか？

Y A : 1940年に兄のツェデンバルが私をウランバートルに連れて来たと話しましたよね。私はウランバートルに来てモンゴル銀行のあった建物の2階にある兄の家に住んでいました。兄は地方によく出張していました。兄が地方に出張すると私は1人になりました。そんなころ、私は同郷のU. バドラフさんの家に入入りするようになったのです。そのウルジーティーン・バドラフさんという人はまさに同郷の人で、しかも同じ村の人でした。バドラフさんは1930年代初頭にモンゴル人民革命党中央委員会の書記を務めていた人でした。その後、最終的には人民革命党内部に「左翼偏向をもたらした」という理由で解任されてしまいました。私が故郷で羊の世話をしている時、バドラフさんはとても素敵な車で故郷に来ていました。私はその時初めて車を見たのです。バドラフさんのきょうだいはわが家の近くに住んでいたのです。バドラフさんは自分のきょうだいの家のそばに車を停め、まだら模様のテントを建ててしまっていました。私は子ど

もだったので車を見にバドラフさんのきょうだいの家に行きました。私は一緒に羊の世話をしていた友人1人と行きました。そこで私たちは柔らかい白いものをもらいました。食べ物であることはわかりました。それで2人でそれを食べてみようとして川岸に行きました。そして草の上に座ってそれを食べてみました。ところがそれは塩気もなく、なんか変な味なのです。一緒に行った友人は「これ、塩が入ってなくてすごくまずい！」と言うや否や、それを遠くに投げ捨ててしまいました。私はちょっと食べようとしていましたが、まずく感じられて食べられませんでした。それで私も遠くに投げてしまいました。あの時、私たちに何をくれたのでしょうか。わかりません。今思えばパンをくれたように思います。当時、私の郷里の人は「パン」というものをまったく知りませんでしたから。1938年にバドラフさんは「モンゴル人民革命党内に左翼偏向をもたらした」という理由で処刑されました。

モンゴル銀行の2階に兄と一緒に住んでいる時、バドラフさんの家に行くとときどき小さな色黒の娘さんも来ていました。彼女がD.エレーという人の子供でもあるということをお私はそのころ聞いたのです。そのエレーさんという人は、オブス県のナランボラグ郡の生まれでした。エレーさんはモンゴル労働者組合中央評議会の議長をしていた人でした。1938年にエレーさんは「政治犯」として誹謗され、処刑されました。1938年には同郷のS.シジェーという人もまた処刑されました。シジェーさんもモンゴル人民革命党中央委員会の書記を務めていた人でした。

バドラフさんの奥さんとエレーさんの奥さんはとても仲良しでした。それでエレーさんの娘さんがバドラフさんの家に来ていたのです。大学を卒業するころ、私はバドラフさんの家を1度訪ねたことがあります。すると、バドラフさんの家に来ていた小さな色黒の娘さんはすっかり大きくなってしまっていて、国家計画委員会の関係でソ連に留学することになったと言うのです。そこへバドラフさんの奥さんが「アヨーシはレーニン・クラブでダンス・パーティがあるといういつも駆けて行くわね。でもそういうところにはいろんな人が来るものよ。そんなところに行かないでこの可愛い娘さんと結婚しなさい！」と言うのです。私はそうやって妻と結婚したのです。そしてわが家は娘3人と息子1人の家族になりました。

1938年にバドラフさんとエレーさんが処刑されましたよね。そのために奥さんたちはとてもたいへんな思いをされたようです。その当時、処刑された人びとの財産はすべて没収されていたようです。それで、彼女たちは財産を没収されたので住む家がなくなってしまいました。ある時、Kh.チョイバルサン元帥にそのことを話す機会に恵まれました。チョイバルサン元帥とは古い知り合いだったようです。それで、チョイバルサン元帥はゲルを1つ与えました。こうして、今の「師範大学」の北側にある囲いの中にゲルを建てて生活し始めたのです。彼女たちは1つのゲルと一緒に暮らしていたようです。

私はウランバートルでの専門学校時代、夏休みは帰郷し、秋の新学期には戻る生活を繰り返していました。秋に戻って来る時はモンゴル・デールを着て帰って来たのですよ。当時、専門学校に通う子どもたちには国から服が支給されていました。私の学校の事務長が私たちの服を回収して1つの袋に入れて倉庫にしまっていました。私は春にその服を返してもらい、郵便局の車に乗って故郷に帰っていたのです。

その後、1950年に母がウランバートルにやって来ました。ウランバートルに来る前の母は私の姉の1人と一緒に暮らしていました。その姉の伴侶が亡くなったので母親と住むようになったのです。その2人が一緒にウランバートルに来たわけです。

KY：お母さんはウランバートルに来てからはどこに住んでいらっしゃったのですか？

YA：母は兄の家の裏手にゲルを建てて暮らしていました。そのころ、兄は嫁をもらっていましたが。兄の家は敷地の広いところだったのです。それに特別な監視護衛体制になっていました。敷地を囲んだ柵の裏手には小さな門がありました。正面にはとても大きな門がありました。そこには多くの護衛兵がいました。母に会う必要が生じると、私たちはまず兄の護衛に電話をし、何時に行くかを告げて許可を取っていました。母は一生涯ゲルで暮らしたので、建物の中では生活できませんでした。母は「建物は空気がなくてムツとするわ。それに板張りの床は音がうるさいわ」と言っていました。

兄はいつもとても忙しい人でした。本もよく読んでいました。夜中の3～4時より前にはまったく寝ない人でした。それでいて朝は早いのです。兄はすべてロシア語で書いていました。それをモンゴル人民革命党中央委員会の翻訳者たちがモンゴル語に翻訳していました。上がって来たモンゴル語訳を自分でも読んで確認していました。私も細かいことはよくわかりませんが、兄の護衛官たちがそう言っていたのです。

兄の奥さんが電話で私たちをときどき呼んでくれました。兄の家では映画が見られました。それで兄嫁は「うちに来て映画を見なさい」と誘ってくれたのです。

私たちがしばしば兄に頼んでいたことが1つあります。それは車でした。子どもの具合が悪くなると病院に行かなければならなくなりますよね。そんな時、兄は私たちに車を貸して助けてくれたのです。人は私に「お前は兄さんにお金をたくさんもらっていたのか」とよく聞きます。兄はお金持ちだったのでしょうか、そうではなかったのでしょうか、全然わかりません。

兄嫁は仕事をしていなかったから兄の給料だけで生活していた家です。人はそんなことを私に聞き続けるのです。私は人には「ときどき病院に行くために兄に車を頼んでいただけだ」と答えていました。私の言葉を信じてくれたかどうか、わかりません。のちに兄嫁は「子ども基金会長」になりました。給料をもらうようになったと思います。兄嫁は、あのロシア夫人は、とても大きな仕事をした人ですよ。1974年にソ連共産党中央委員会のL.I.ブレジネフ書記長がモンゴルを訪問した際、ウランバートルに「結婚宮殿」をソ連の資金で建設する許可を取ったのですから。それに、幼稚園も数多く建設さ

せました。

## 9 兄嫁フィラトワ

**KY**：お兄さんの奥様であるA.I.フィラトワさんと初めて会ったのはいつですか？

**YA**：私はソ連に留学していましたよね。その時に会ったのです。当時、兄は「第1次5ヶ年計画」の策定のためにモスクワに来ていました。兄はモスクワに5ヶ月ほどいたと思います。私は時々兄の宿泊していたモスクワの「メトロポーリ」ホテルに行っては兄に会っていました。

ある夜、兄の護衛官から電話があって「今晚お兄さんと一緒にあるご家庭に行ってお食事をしますよ」と言われました。すると、今度はI.V.ヴァジノフというロシア人からも電話をもらいました。彼もそのことについて話していました。その家庭はホテルにとっても近いところにありました。

行ってみると私に電話をかけて来たヴァジノフさんが1人のロシア人大佐と一緒にいました。それからロシア人の女性も1人席についていました。彼らの向い側には若いロシア人の娘さんが2人座っていました。外から入って来た私たちは空いている席に座りました。兄の護衛官は私を彼らに紹介しました。私は自分の名を言い、全員と握手しました。それから身近な話題を話していたところ、まもなく外から兄が入って来ました。そして全員で1つのテーブルを囲んで夕食を食べました。

そして私はそこからどこにも立ち寄らずに寮へ戻りました。私たちと一緒に食事をした若いロシア人の娘さん2人のうち1人は私の兄嫁となる人でした。そこにいた女性3人は姉妹だったのです。そこにいた大佐とヴァジノフさんは友人でした。彼ら2人はともにクレムリンで働いていた人たちでした。ヴァジノフさんはモンゴル人民革命党の「顧問」としてモンゴルにいた人だったのですよ。彼はI.V.スターリンとよく会っていました。I.V.ヴァジノフというそのロシア人は兄と兄嫁の結婚の仲立ちをしていたようです。兄はそのことについて何も話しませんでしたが、そのことについては兄の護衛官たちからのちに聞いて知ったのです。そうして私は初めて兄嫁を見たのです。1947年に兄嫁はウランバートルにやって来ました。

**KY**：アヨーシさんたちはお兄さんの家によく行きましたか？

**YA**：兄の家にはよく行きましたよ。兄嫁は「うちに来て映画を見なさい」と妻と私を誘ってくれました。兄の家ではさまざまな映画を見ました。だいたいロシア映画です。農牧業や医学に関する映画も見ました。

わが家は現在の将校宮殿の向かい側に長いあいだ住んでいました。そこには「協同組合連盟」の所有する住居や職員住宅がありました。その後、貿易省に勤務することになってから私たちはウランバートルの中心部に移って来たのです。兄には子どもが2

人いました。長男はウラディスラブ、次男はゾリグという名でした。この2人には兄がいましたが、生後まもなく大きくなることもなく亡くなってしまったのです。今、甥のTs.ゾリグはモスクワで生活しています。幼い時はよくわが家に駆けて来たものです。ゾリグは今ウランバートルにときどき来ます。

1999年にウラディスラブは亡くなりました。

**KY**：今度はA.ボヤントゥグス（アヨーシさんの次女）さん、ちょっとお話をなさいますか？

**AB**：父がハンガリーに赴任した時、私はウランバートルに祖父母と一緒に残りました。当時、私は父の兄の所によく行っていたのです。叔父さんの家にばかりいました。というのも叔父さんの家は女の子がいなかったからです。それで私を自分の子どものように思ってくれました。私にいろんなことを教えてくれました。

1984年以降、叔父さんは家族と一緒にモスクワで暮らすようになりました。私は1986年から89年にかけてモスクワ国立大学で勉強していました。当時は叔父の家へしょっちゅう行っては叔父さん夫婦と会っていました。2001年8月に私は大学院で学ぶためにモスクワへ行きました。その時に私は伯母と再会したのです。彼女は私が行くととても喜んでくれました。私たちの再会后2ヶ月して彼女は亡くなりました。

**IL**：その息子のTs.ゾリグの書いた『最後の7年間』という回想録を読みました。その本の中でTs.ゾリグが「父を解任したのはまったくの陰謀であった。1984年7月末に父と母と私の3人はソ連に休養しに行きました。わが家は何年もそこで休暇を過ごしていたのです。その際、モンゴルから出発した時点では、父は健康上何ら問題もありませんでした。ところが、ソ連の国家安全保障委員会(略称KGB)が父たちをすぐに〈自宅軟禁〉にしてしまったのです。クレムリンの医師たちがお父さんの体の具合はよくありません。仕事をしてはいけません。ここで治療をする必要があります、と言いました。でも、彼らは病状の診断結果について明確に説明できませんでした。父たちがモスクワで〈自宅軟禁〉状態になっている時に、モンゴル人民革命党中央委員会の第8回総会が開催され、父はあらゆる役職から解任されてしまいました」というようなことが書かれています。このことについてご意見はありますか？

**YA**：そんな話を耳にしていました。そういうふうに言われています。その会議が開催される前、私は兄に会っていました。兄は私とは多くを語り合う人ではありませんでしたから。時おり、私の仕事がどうかと聞いてきました。ほかのことはまったく語りませんよ。兄はとても無口な人だったのです。話し好きの人っていますよね。兄はそういう人ではありませんでした。本当におしゃべりが好きではない人でした。誰かが兄に質問すれば答えてくれます。自分から話題を持ち出したり、話し始めたり、話してばかりというようなことはめったにありませんでした。とくに、きょうだいに対して政治や国の情勢や、自分の仕事についてはまったく話しませんでした。私たちを相手にしていませ

んでした。兄はそんな話題は自分と同等のレベルの人としか話しませんよ。私たちとはそういう話はまったくしませんでした。でも本を読むのはとても好きな人でした。1冊読み始めると読み終わるまでその本から離れない人でした。

兄が亡くなる直前に兄嫁は私を呼び寄せました。そのころ、私はブルガリアのモンゴル大使館で通商代表として勤務していました。私はモスクワに赴き兄と会いました。私と会った時、兄の身体は本当に悪くなっていました。モンゴル人は油脂を料理によく使いますよね。だからわが国では肝臓や胆嚢の病気が多いのです。兄にもそういう症状が表れたようでした。私は何日間か病院で兄のそばにいました。

朝の11時ごろになると兄は注射を1本打たれていました。何という名前の注射だったのかはわかりません。その注射は兄には合わないように私には思われました。その注射を打ったあとの兄の身体はなんだか変になってしまっているようでした。「忘れっぽくなってきているのかな」と私には感じられました。体が悪くて寝たきりになっている人は健康な人のようにはいられませんよね。それに大いに年もとっていました。

兄は、本当は「とても記憶力の良い人だった」と私は思います。兄はソ連の74種類の印刷物を注文して読んでいました。読んだすべての資料の必要な箇所に赤や緑の色鉛筆で印をつけ、端にメモを書いていました。それで、部下に何年の何と言う雑誌の何号にどんな資料があるかすべて何も見ずに言って「その資料を取って来い」と言いつけていたのです。私はそんな話を部下たちから聞いていました。兄は家にとってもすばらしい書庫を持っていました。各国に駐在するモンゴル大使館を通じてとても良い書籍を兄は集めることができたのです。

**KY:** その書庫は、今はどこにあるのですか？

**YA:** 兄の書庫はもうありません。書籍の一部は「国立中央図書館」に寄付したのでしょうか、しなかったのでしょうか、わかりません。兄があらゆる役職から解任されたのち、兄の「邸宅」にあった家財道具や所有物はあちこちに配られてしまったのです。どんな機関の決定によるものなのか私にはわかりません。モンゴルの国家元首だった人が毎日使用していたものをあちこちにばら撒き、無駄にしたことについては非常に無責任な行為であり、とても残念なことです。兄が書いていた「日記」やさまざまな時に受けた賞の記念品、そして地図や調理器具を国家検察庁が没収したという話がありました。

でも、兄がもらった数々の国家勲章はどこに行ってしまったのでしょうか。わかりません。兄に対してモンゴル人がくれた「記念の品々」はたくさんあったのです。それらは今どこにあるのでしょうか。まったくわかりません。兄には銃も数多くありました。兄は狩猟をする人ではありませんでした。でも、外国の人たちが兄と会う際に銃をプレゼントしてくれていたのです。

兄は多くのロシア将官たちと個人的に仲の良いつきあいをしていました。兄がモスクワに住んでいた時、彼らからいつも電話がありました。兄は1939年の「ハルハ河戦争」

において陸軍中將として参加していたのです。のちに「元帥」になった人ですよ。兄の「邸宅」にあった銃は内務省が没収したようです。その後、博物館に移されたかもしれませんが。1984年に開催されたモンゴル人民革命党中央委員会第8回総会のことについて、兄は私と1度も話したことはありませんでした。

I L：アヨーシさんが貿易省に勤務されていたころ、貿易赤字のことについての話は出ていましたか？

Y A：貿易赤字はありました。輸出品と輸入品の価格に差が出ることがありました。わが国は自国産の物品を輸出して、その代わりに自分たちに必要な物品を仕入れるわけですよ。そういう時は価格の差が出ました。そうしたもののすべてが貿易赤字となっていたわけです。世界市場においては加工した製品を出せば利益が多く出るものです。たとえば、カシミアを原材料のまま、つまりそのまま出すのと、カシミアでセーターを作って出すのでは大きな違いがあるのです。わが国はそういう工場生産の形で作った製品を輸出しようと大いに頑張っていました。ソ連はわが国から畜産原材料を輸入する主要国です。

貿易省には「価格課」という課がありました。価格課では世界市場の価格変動についての情報を常時入手していました。モンゴルは需要の高い物については殆どすべてソ連から輸入していました。そのすべてについてモンゴルはお金を支払って購入していました。ソ連はモンゴルの主要貿易相手国でした。

工場や道路の建設など大規模な投資が必要な事業については、わが国はソ連から融資を受けていたと思います。わが国はソ連に家畜を輸出していました。家畜を生きたまま輸出するのは損です。家畜はだいたいハトガル税関から輸出していました。ソ連はわが国から生きた家畜を輸入するにあたり、厳しい要求を出していました。家畜の伝染病が出た場合、家畜の輸入は完全に止まってしまいます。時どき伝染病ではなくても1頭に軽い病気の症状が出ると輸入しないことがよくありました。わが国の中継基地には農牧業省の獣医たちが勤務していました。彼らは家畜の健康状態についてソ連側に報告していました。家畜の受け取りの際、ソ連側の専門家たちと交渉することがよくありました。私は何度かハトガル税関に行き、ロシア人たちと数々の問題を処理してきました。貿易省にはD. ガンジョールジャブとS. ツァガーンドルジ、そしてB. ツェレンデンデブといった優秀な職員がいました。彼らはロシア人とすぐに打ち解けるし、仕事もよく分かっている、経験のある人びとでした。何よりも記憶力が良いし、機転の利く人たちでした。彼らはウブルハンガイやアルハンガイあたりの中央ハルハ地域の出身でした。

外国から輸入した物品を国内の市場で売際の価格は「価格規格国家委員会」が決めていました。当時は物価が安定していましたからね。ある品物の値段が何年も変わらないことがあったのです。新しい品物には新たに価格をつけていました。社会主義国は国が物価に対して厳しい価格統制をとっていましたのでそういう国々と貿易するのは簡単

でした。でも、資本主義国と貿易を行う際は、物品それぞれについて価格交渉をしますよね。とても面倒な仕事です。

モンゴルが貿易を行う際、輸送の問題がとてもたいへんでした。モンゴルには海路がありません。外国から輸入するすべてを鉄道か空路で輸送します。ヨーロッパの国々から輸入する際はシベリア鉄道を利用しなければなりません。非常に長い道の間を歩いてモンゴルに入ってくるのです。私たちはソ連に鉄道利用料を支払います。小規模で軽いものは空輸することができます。空輸はすべてモスクワを経由していました。

**KY**：さて、私たちの今日のインタビューも終わりが近くなってきました。残り少ない時間ですが、アヨーシさんの方からさらに加えておっしゃることはありますか？

**YA**：そうですね。私は自分のして来た仕事についてみなさんにお話してきました。みなさん、必要な部分を選択されるのでしょ。ほかに言い足すことは思い浮かびません。

**KY**：そうですか。興味深いお話をしてくださいますありがとうございます。

